

天草方言で読む【枕草子】 鶴田 功〈訳文〉

平安期 清少納言による随筆集

枕草子 清少 納言〈原文〉

春は曙

春はあけぼの やうやうしろくなり行く 山ぎはすこしあかりて
むらさきだちたる雲の ほそくたなびきたる

夏はよる 月の頃はさらなり

やみもなほ ほたるの多く 飛びちがひたる

また ただひとつ ふたつなど ほのかにうちひかりて いくもをかし

雨など降るもをかし

秋は夕暮れ 夕日のさして 山のはいとちかうなりたるに
からすのねどころへ行くとして

みつよつ ふたつみつなど とびいそぐさへあはれなり

まいて雁^{かり}などのつらねたるが いとちいさくみゆるは いとをかし

日入りはてて 風の音むしのねなどは またいふべきにあらず

冬はつとめて 雪の降りたるは いふべきにもあらず 霜のいとしろきも

またさらでもいと寒きに 火などいそぎおこして

炭もてわたるもいとつきづきし 昼になりて ぬるくゆるびもていけば

火桶^{ひおけ}の火もしろき灰がちになりて わろし

※ をかし（風情があってよい・風流である・情景に趣がある・興味深い・美しい・面白い）

※ あはれ（情緒的な感情・感慨深い・心打たれる・愛おしい・可愛そうだ）

〈意識〉

春は（何ちゅうたっちゃ 明け方がよか） よようして しらじらなりかけに
山際んちいっとばかり明こうなって 紫掛かった雲ン

細うに漂^{ただよう}うとっ処が（よか）

夏ア夜さが（よか） 月の晩な殊更^{ことさら} 闇夜っちゃ 蛍のいっぴゃ飛び交いよる

また たった1匹テロン 2匹テロン ぼわーっと光って 飛ぶともよか。

雨ドンが 降る夜もよかー

秋や 日昏れじゃナ 夕日に映えて 山際に近こう 日ノ沈む時分に

烏^{からす}ン住みかに戻ちゅうて 3羽4羽 2羽3羽とか

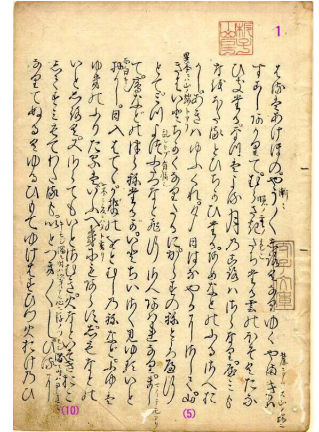
いせーで、飛うで戻りよっとも 情緒んあってよか。

まして 雁^{かり}の連なって飛ぶトン こもうに見ゆっとは よか風情ぞ

日の暮れて 風ン音 虫ン声なんぞは 言うに及ばん なんさまよか

冬は朝ごっとき 雪ンン降るとれば 言うまでもなかばって 霜ン真っ白なって

またソン上 ひどう寒うして 火ドン せしこて熾^おけーて 炭バ持って行くと



冬^{じょうけい}情景にゆう合うとる

風になって ぬくうなってから持って行けば
火桶^{ひづく}ン火も 白灰^{しろこ}ばかり一^{いっ}なって 味気^{あじ}なか

正月一日は

正月は結構な月じゃある。まして、元日は空模様もうららかに晴れて、珍しゅう一面に霞^{かすみ}ン掛かっとる中を、誰も彼も身なりや化粧も念入りにうったって、主君とか我が身の幸運を祈って、挨拶交わしたりしとらす様は、とりわけ趣^{おもむき}ンある。



正月七日は、雪^{ゆき}ン間から顔^{かほ}バ出したばかりの若葉^{わかしよ}ン青々したとば摘んできて、普段そが^{そが}ん関心のなか野菜^{やさい}バ宮中^{みやちゆう}でん持てはやされるちゅうとも面白^{おもしろ}か。

そん日は、また白馬^{あお}の儀式^{ぎしき}バ拝観^{はいかん}しゅうとして、京の町の人たちが牛車^{ぎしや}バ綺麗に仕立てて出かけて行かすとん、待賢門^{けんたいもん}の敷居^{ふきい}バ通る時、車^{くるま}がえっと揺れて、乗^{のり}とる者同士が頭^{あたま}バ鉢^{はち}合わせして、前髪^{まへかみ}に刺^さやーとる飾^{かざり}り櫛^{くし}ンつこけたり、前から注意^{ちゆうい}しとらんば、そりが折^おれたりして、とんだ滑稽^{わづかし}なへま^{へま}バして、笑^{わら}(わる)笑^{わら}うとも一興^{いっけい}じゃある。

待賢門^{けんたいもん}から入^い(ひゃー)って、右^{みぎ}さんまぎった建春門^{けんしゆんもん}のにき出れば、殿上人^{てんじやうびと}などが大勢立^たとらすとん、近衛^{このゑ}の舍人^{とねり}ン弓^{ゆみ}どん借^かって、通^{とほ}る馬^{うま}バ突^つついて驚^{おどろ}きやーて、面白^{おもしろ}がったりしとる。

車^{くるま}ン中^{ちゆう}から恐^{おそ}る恐^{おそ}るちらっとそり^{そり}バ見た時、立部^{たてしとみ}なんの^のン見^みえて、そこを主殿司^{とのもつかさ}や女官^{にょくわん}なんぞが行^いったり来^きたりしとと^とン見^みゆつとが面白^{おもしろ}か。

一体^{いったい}、どがしこ果報^{くわくわん}な人^{ひと}たちがこの宮中^{みやちゆう}バ、何^{なに}の恐^{おそ}れものう、馴^なれ馴^なれしゅう振^ふる舞^{まひ}うとるかと思^{おも}えば、羨^{うらやま}ましか。

宮中^{みやちゆう}ちゅうても今^{いま}見^みとつ所^{ところ}は、狭^{せま}か範囲^{はんい}だけん、晴^はれの化粧^{けしょう}バした舎人^{とねり}の顔^{つら}ン生地^{おしろい}もはつきり見^みゆる。白粉^{おしろい}ンこっ剥^むげたところは、ま^まで黒^{くろ}か庭^{にわ}に雪^{ゆき}ン所^{ところ}ど^どころ解^とけてまだらにな^なつとつとば、思^{おも}い出^でやーてどもこも見^み苦^くしか。

ばって、馬^{うま}ン飛^とび跳^はぬつとん恐^{おそ}ろしかけん、車^{くるま}ン中^{ちゆう}きやーひ^ひっかじゅうど^どって、他^たン事^{こと}はゆうつと観^{くわん}察^{さつ}でけんじゃった。

八^{はち}日は、女官^{にょくわん}たちの位階^{ゐかゐ}が叙^{じゆ}せられたり、女王^{にゅうわう}に禄^{ろく}バ賜^{たま}う日^ひだけん、そん人^{ひと}たちがお礼言上^{れいごんじやう}に参内^{さんだい}しなすとに、走^はらせらす車^{くるま}ン音^ねも普^ふ段^{だん}よりか格^{かく}別^{べつ}に聞^きこゆるけん面白^{おもしろ}か

十五日^{じふご}は、十五日^{じふご}粥^{かゆ}バ主上^{しゆじやう}に差^さし上^あぐる日^ひですたい。老女^{らうにょ}と女房^{にょぼう}たちが粥^{かゆ}の木^きバ、後^{のち}ろに隠^{かく}いて追^おいま^まくらす。他^たン乳房^{にゅうじゆん}たち^ちや打^うたれん^んごて用^{よう}心^{しん}しつとに、うまいこて打^うった時^{とき}ン得意^{ていぎ}そうな笑^{わら}い声^{こゑ}は、大層^{たいじやう}陽^{やう}気^きじゃある。宮中^{みやちゆう}ンごて高^{たか}貴^きな所^{ところ}でん、こ^こん日^ひばっかり^{かり}や無^む礼^{れい}講^{かう}で遠^{とほ}慮^{りよ}も謹^{きん}慎^{しん}もなか。

正月^{じやうげつ}に地方官^{ちほうくわん}叙任^{じゆにん}の式^{しき}ンある頃^{ころ}どま、宮中^{みやちゆう}あたり^{あたり}ン様^{よう}子はまた格^{かく}別^{べつ}面白^{おもしろ}か。雪^{ゆき}ン降^ふって氷^{こおり}ン張^はつとつ時^{とき}、任官^{にんくわん}申請書^{しんけいしよ}バ持^もって歩^あき回^{まわ}つとる四^し位^ゐ、五^ご位^ゐの人^{ひと}たち^ちや若^わ々^々しゅうして朗^{らう}らかで、如何^{いか}にも頼^{たの}もしか感^{かん}じのするばって、頭^{あたま}ン白^{しろ}うな^なった人^{ひと}が、人^{ひと}に取り次^{とりにぎ}

ぎバ頼んだり、女房の部屋なんか立ち寄って、身分の優れている訳バ所懸命に説明しよつとば若い女たちが馬鹿やーして、そん口真似して笑うたりしとつとに、当人なそがんことも一向に知らっさん。「よろしく主上（天皇）に申し上げて下さい。中宮様にもよいようにお伝え下さい」ちゆて頼んでも、任官の出来た人はよかばって、何の役にもありつけんじゃった人にゃ、気の毒くいもん。

おなじことなれども

意味は同じっちゃ、耳に聞いた感じの違うとは、先ず僧侶のことばが、そり。男ンことばと女ごんことばにも違いのある。

教養のなか者のことばには、いつも余計なことばン混じつとる。ことばは少なめの方がよかばってか…。生い先なくまめやかに前途の楽しみもなかとに、ただ忠実に夫に仕えるちゅうごたる自己バ欺いた幸せバ夢見とるごたる人がおらしたら、鬱陶しゅうして馬鹿らしか。

矢っ張り、身分の高っかお方ン娘などは、結婚前に宮使いに出し、世の中ン様子も見聞きさせてやろごたる。例えば、いっときの間でン内待の助などにでん、してやりたかもんだち思う。

宮仕えする女御^{おなご}ンことば、浮気でつまらんもののごて言うたり、そがんふう^{ふう}に考えとる男もおるばって、実に憎らしか。

ばって、一方から見れば、そりも尤もて言われる。ちゅうのは、宮仕えをしとればもの申し上げるも恐れ多か主上、皇后を始めとして、公卿^{くぎょう}・殿上人^{てんじょうびと}・五位・四位は言うに及ばず、およそ顔バ合わさん人は殆どなかろう。更に女房の召使い・女房の里から使いに来る者・雑役婦や掃除人などン従者、その他身分の低っか者に至るまで、そがん人(しい)人に顔を合わすつとバ恥ずかしかちゆて隠れたりしとられますか。宮仕えの殿方じゃったっちゃ同じじゃかろうかい。宮仕えしとる限りは誰でん顔バ見らるつとは当然たい

そがん意味で、奥様なんちゅうて大事にすつとは、宮仕えした事ンある女は、人擦れして奥床しゅうなかがて思われるちゅうとも尤もじゃある。

ばってまた、内待の助ちゆて呼ばれて、時折り参内してご用バ勤めたり、加賀の祭ン使いなどに立ったりすつとも名誉なことじゃなかっどうか。

それほどん人でありながら、そがん風にして家に落ち着いとらすとは、一層立派じゃある。

受領が五節の舞姫バ奉る時なんかでん、妻がしっかりしとれば、まっで田舎びてつまらんこつでん、いちいち人に尋ねんでもすむ。そりも奥床しかもね。

上にさぶらう御猫は（第九段）

清涼殿で飼うとらす御猫は、五位の位を与えて「命婦^{みょうぶ}のお許^{とど}」ちゅう名前まで付けとらした。

どもこもみぞかもんだけん、主上も中宮様もそりやー大事になさっておられた。

その猫が縁先で日向ぼっこしながら居眠りしよる。お守役の馬の命婦^{みょうぶ}が「まあ、いけ

んませんネ、お入りなさい」ちゅうたが、いうこた聞かん。

よし、おどかしてくるる。「犬の翁丸はどけおるかい。命婦のお許とどに噛み付け」ちゅうたりゃ、馬鹿犬は、走りよって飛び掛った。猫はびっくりして、御簾の中に駆け込うだ。

ちょうどその場をご覧になっとらした主上しゅう上は、大変驚かれて 猫バ腕うでに抱き上げ殿上の侍臣たちバ呼びなさった。そしたら蔵人の忠隆様と成仲様が駆けつけて来らした。帝は、「翁丸バこらしめて、犬島に追放せろ、たった今」と仰ったけん、人が集まって来て翁丸バ捕まえて大騒動になった。

一方、帝はお世話係の馬の命婦もお叱りになって、「世話係バ代えてしまおう。お前では、とてもじゃなかばって安心できん」と仰った。馬の命婦は謹慎して、御前にも出てこらっさん。

翁丸のほうは、追い立てられて、滝口の武士達から外に追い出された。「かわいそうか、堂々と歩き回ったとに……。三月の節句ン時なんか、行成様が柳ン冠、桃の花ンかんざしに桜の枝バ腰に挿してあげたとに。あん時や、まさかこがんひどか目にあうとは思ってもおらんじゃったろで」

「定子様のお食事ン時なんか、必ずおそばにおったて、おらんごてなってさびしかね」と女房たちと話バして、3・4日経ったお昼ごろ、ひどう犬ン鳴き声ンするもんだけん、どこん犬がこがん長うまで鳴くとじゃいろと思って聞いとったりゃ何匹もの犬が、鳴き声のほうさん様子バ見に行たとった。

いっときしたりゃ、掃除役の女ン人が走ってきて、「大変ですばい蔵人の方がお二人で犬バお打ちになっとらす。あれじゃ、犬は確や死んでしまいますばい。追放した犬が戻ってきた、とうて懲らしめとらすとですばい」と言うたので、私は、それは確や翁丸じゃろうて思ったとよ。

忠隆様や実房様が打つとる、と聞いたから、使いの者に止めに行かせたっばって、じきに犬ン鳴き声は止うだばって、使いの者が帰ってきて、「犬は死んだけん、陣屋の外に捨ててしまいやした」と言うたとば聞いて、私はすごく悲しうなって、心バ痛めたとよ。

ソノ日の夕方、ビックリするほど傷が腫れた犬が震えながら歩きまわっとるもんだけん、「翁丸じゃかとね今時、翁丸の他にこがん姿ン犬が歩き回っているはずなかるで」ちゅて女房の一人が言うもんだけん、「翁丸」と呼んでみたばって、犬は聞こえんフリをしとる。

たくさんの女房たちが「翁丸ばい」とか「いやいや、そうじゃなかる」と、口々に言うけん、定子様が、「右近なろバ見分けられるはず。呼うで来え」とおっしゃったけん、右近が参上してきた。

定子様が、「こん犬は翁丸かどうかわかるか」ちゅてお聞きになる。「うーん、似てにゃおりますばってひどか状態ですね。それに、私が名前バ呼ぶと、すぐに喜んでやって参りますばってか、こん犬は呼うでも寄って来ません。違う犬じゃろうと思います。翁丸は『打ち殺して捨ててしもた』と申しておりました。二人がかりで

打ったといいますけん、生きてはおらんでしょう」ちゆて右近は答えたけん、定子様はとてもお心をお痛めになった。

暗うなってから、例の傷だらけの犬に食べ物バあげたばって食べんけん、翁丸とは違う犬だと決めこんでいた。

翌朝、私に鏡バ持たせて、定子様が髪の毛バ整えたりお顔バ洗ったりなさるけん、お側にいたら、例の犬が柱ン下でうずくまっととバ見つけた。

「コン前は、翁丸バこっぴどく打ったものですばい。死んでしもうたちゅうて、かわいそう。今度はどんな姿に生まれ変わっどかい。死ぬ時や、さぞかし辛か気持ちじゃったでしょうね」

と私がいうと、うずくまっていた犬が、ブルブルと体バ震わせて涙バボロボロと落としたとよ。

きっ魂消えた。コン犬は、翁丸じゃった。

昨夜は、お咎めバ受けている身だけん素性バ隠しとったった、いじらしか上に賢か犬ばい。

私は、持っていた鏡バ置いて、「お前は翁丸かい」ちゆて聞いたりや、ひれ伏して鳴いて答えた。定子様もコン姿バ見て、お笑いになった。

右近の内侍バお呼びになって、話して聞かせたりや、女房たちも大笑いした。コン話は、帝もお聞きになって、定子様のお部屋においでになった。「魂消るね、犬にもそがん心があるもんばいね」ちゆてお笑いになった。

帝付きの女房たちも、コンことバ聞いてこちらに集まってきて、彼女たちが「翁丸」と呼ぶ声に、翁丸は悪びれもせず答えて歩きまわって見せた。

「まだ顔とか腫れとるもね。傷の手当てバしてやらんばんね」ちゆて私が言うと、女房たちが

「とうとう本音バ言いなさった」て言って笑うた。(私が翁丸びいきだから、こがんこと言うてからかうとよ)

すると、忠隆様が話バ聞きつけて、台盤所の方からやって来て、「本当ですか。ソング犬バ見てみましょう」と言うたので、私は、「まあ、違いますばい。そがん者ナ決していません」ちゆて人に言わせたとばって、「そがん隠してもいつかは見つかってしまうもん。そうそういつまでん隠してはおけんばい」ちゆて言われた。

その後、翁丸は帝のお咎めも許されて、以前と同じ、宮中で飼われる身に戻った。それにしても、私の言葉に身を震わせて鳴き出した時の様子は、たとえようもなく驚いた。なんさまいじらしいものじゃった。

他人から思われて泣いたりするなんで、人間しかしなかと思っていたけん、犬がそがんことするとは、思いもせんじゃった。

にくきもの（第二十八段）

憎たらしかもの。急ぎの用事ンある時に来てダラダラと長話バするヤツ。適当に扱っていい相手なれば「後で」ちゆて追っばらわるるばって、そうも言うておられんお

エライ相手の場合は追っばらうこたできんけんめっちゃくちゃイライラする上にむしゃくしゃする。

硯ン中に髪の毛が入って、しかもソソことに気づんで磨られた。それから、墨の中に石が混じって、ソソ石がキシキシ音立てるのも好かん。

急病人がおる時、祈祷する人バ迎えに行かすれば、ソソ人がいつもいる場所におらんけん使いの者がよそバ探し回っている時間が、病人とかその家族にとってはすごく待ち遠しく感じらる。やーっとお目当ての祈祷師バ迎えることが出来て、喜うで祈祷バさすつとばって、ソソ祈祷師ちゅえば最近いろんな所での物の怪退治に 関係しとって疲れとるらしくって、座ると直にお経バ読む声が寝ぼけ声になる。実に腹ン立つ。

たいした取り柄のなか人が、得意顔でにこにこしながらべらべら喋りまくるけんしゃくに触る。

丸火鉢と角火鉢なんかに手のひらバ返し返しに当てて、手のシワバこすって伸ばしたりする人。

若い子はそがんことせんばって、年ととる人に限って足まで持ち上げて、話バしながら足バこすってるごたる。

そがんことする人は、人ン所に来て、自分が座ろうと思うとる辺りバまず扇であっちこっちバタバタ扇いでゴミ掃除したり、落ち着いて座つとらでん身体バフラフラさせて、狩衣の前ン垂バ膝の下にまくりこうで座ってる。こがん無作法なことすつとはロクなヤツじゃなかって思うんとばって、ちょっと身分のある式部大夫がやって来た。お酒バ飲んで大声出して、口のまわりバ撫で回して、髭なんかがある人はそれバ撫でて、杯バ他人に押しつけてくる時や腹ン立つね。

「もちっと飲みなっせ」 て言うて、身体バ振るわせて、頭バ振って口までへの字に曲げて、子供ン「国府殿に行たてね」とか、 歌う時ン格好バしたり。そりも、よりにもよって本当におエライ人がなさつとば見たつとばってほんなこて、見ゅうごとも無か。

なんでんかんでん羨ましゅう思うて、悲劇の主人公みたいに自分のことバ言うたり、他人の噂ばかりして、ほんのちょっとしたことでん 知りたがって、教えんば恨んだり文句言うたりで、ちょっと聞きかじったことでん、いかにも自分が初めから知つとることばしんごて他人にべらべら喋りまくりやがる。

話バ聞こうと思う時に泣き出す赤ん坊

カラスが集って飛び回り、ガァガァ騒がしくしてるごたる。人目バ忍んで、こそつと通つて来る男バ見つけて吠える犬。

とんでも無か無理な狭か場所に隠して寝かせとつた男が、イビキかいとる。

忍んで来とるところに長烏帽子どんかかぶって、それで見つからんごてあわてて入つて来つとばって、どけか烏帽子バぶつけてガサツと音立つつとよ。伊予簾なんか掛けてあつとば頭に引っかけたてザラーツと鳴らきゃーたりして、ホンテ憎らしか。

帽額もこうの簾は特別。端つこのあたる音がひどく目立つとばって、そつと引き上げれば音は立たんとよ。

遣戸やりどバ荒つぽく開け閉めすつとも下品か。 ちよつと持ち上げれば音は出んとば、下手

に開くるけんふすま障子なんかでんゴトゴト音が目立っとたい。

眠かと思うて横になっつとに、蚊が細か声で情けなさそうに鳴いて、顔の辺りバ飛び回るけんいっちょ前に羽風なんぞバ身分相応にあつとか。齒痒かまこて。

ギッシギシうるさか牛車に乗っとるヤツ。「耳が聞こえんとか」て思うせからしかっじゃっでもう。

ばって、うっかりそがんうるさか牛車に自分が乗ってみろね。そん牛車の持ち主恨むばい。

話バしとつとに出しゃばってきて、自分一人盛り上がっとるヤツ。出しゃばりちゅうとは、子供も大人もイライラするもんじゃある。

 [トップページへ戻る](#)